

あるむぜお86

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 86

2008年12月20日



龍昌寺跡 川崎平右衛門供養塔

目次

- 1-2 シリーズ川崎平右衛門定孝の墓めぐり
 - ③島根県大田市大森町 龍昌寺跡
- 3 展示会案内
 - 特別展 代官 川崎平右衛門～時代が求めた才覚の人～
- 4-5 ノート 都市化と自然再生
- 6 新米学芸員の交換日記
- 7 最近の発掘調査
 - 国史跡 武蔵府中熊野神社古墳の最新情報
- 8 展示室リニューアルトピックス ①

川崎平右衛門定孝の墓めぐり

③島根県大田市大森町 龍昌寺跡

「えーっ、あのお墓に行くの？ マムシが出るかもしれないよ」と、前の年に行ったことのある人に脅されながら出かけた石見銀山の町、島根県大田市大森を歩いたのは2007年の6月、雨模様の夕方でした。

銀山がさかえていた頃には、一説には山の中まで含めて、20万人もの人口があったともいわれますが、一筋道の両側に低い家並みが連なる町は、しっとりとした風情をたたえていました。

四方を山に囲まれて、喧騒けんそうというものと無縁に見える景色は、自然と「あー平右衛門さんもここまで来たんだなあ」と感慨深く思ってしまうような静けさでした。

戦国時代に発見されて西国大名たちの財政を支え、遠くヨーロッパまでも日本の銀を知らしめた石見銀山は、江戸初期からは徳川幕府の直轄領ちよつかつりょうとなりました。幕府財政の資金源としての鉱山と、それを取り巻く地域の統治のために、初代奉行大久保長安以来、ここには名だたる奉行や代官が名を残しています。

美濃みのの時代、宝暦4年(1754)に御目見以上に任ぜられ、名実共に代官職にふさわしい地位を得ていた平右衛門もそれに加わることになりました。

宝暦12年(1762)8月1日、明2日は日が悪いから夜遅くなくても今日の内に大森に入ってしまうおうと、新たにこの代官として赴任してきた川崎平右衛門の一行は山道を登って来ました。彼らが町の入口にある代官所に到着したのはもう10時を回る頃でした……。

それから5年間、彼は野の国(武蔵野新田)と水の国(美濃国)での経験をこの山の国で十分に活かし、当時減少傾向が続いていた銀や銅の産出量を上向かせる施策の手を打ちました。

代官所主導による弱体化した民間資本の増強と、鉱山開発の直営化がその主体でしたが、それは彼の跡を継いで、この代官職に就くことになった息子の市之進定盈いちのしんさだみつ、孫の平右衛門定安に受け継がれ、3代25年の間に銀・銅の産出量が回復したと研究者は述べています。

その仕事ぶりはまたもや幕閣の目にとまったようです。明和4年(1767)4月、勘定奉行所のNo.2といえる勘定吟味役に異動になるとすぐ、5月に銀山奉行を兼任することになりました。これから彼が諸国しよこくを巡視するので、新たに鉱山を開き



たいと思う者は申し出るようにと全国に告げられたのです。鉱山のスペシャリストとして認められていたからでしょう。

しかし、平右衛門はこの仕事にかかることは叶わず、6月6日に亡くなりました。

奉行代官の墓所も多かった龍昌寺跡は、大森の町をはずれた辺りにあります。道路からそれて行くと、うっそうとした木々の中に数十段の苔むした階段が見えます。登り着くと無縁になった墓々がかたまり、

五輪塔らしき石が周りに点在しています。それらの中に、定盈の幼い娘と定安の妻の墓もあることは調査報告書で知りました。

定孝の墓はその手前を左手に少し登った細い道の際に壊れずにありました。戒名は「靈松院れいしやういん殿忠山道榮居士」。「大」の字はありませんでした。墓前の2基の石灯笼いしどうろうに「酬恩」の文字があるようですが、これらと墓が一体のものかどうか私には分かりませんでした。おそらくこの墓は、彼の逝去後にこの地の現役代官だった息子が孫が造立したのでしょう。

幸いマムシに出会うこともなく、足元も難なく探訪できたのですが、これは、世界遺産登録準備の一環として整備されたばかりだったとのこと。それから程なくして石見銀山は世界の文化遺産になりました。



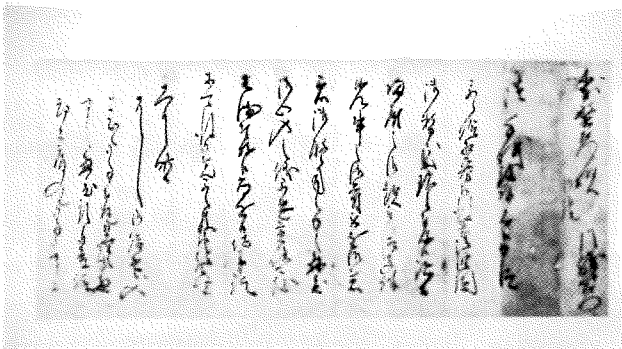
興禅寺 川崎平右衛門年忌法要(平成20年5月31日)

展示会案内

特別展

代官 川崎平右衛門

～時代が求めた才覚の人～



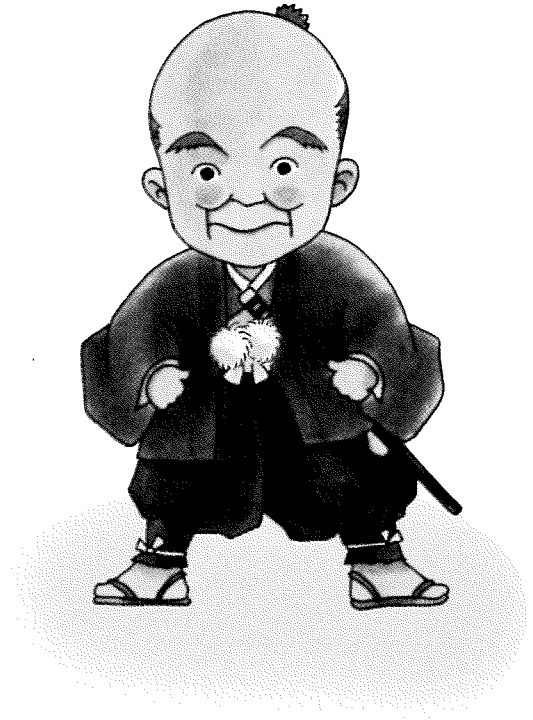
平右衛門自筆の書状 岐阜県瑞穂市興禅寺蔵

84号より毎号お届けしている川崎平右衛門の
展示会がいよいよ開催されます。

府中で生まれた幕府代官・武蔵野新田(野の
国)・美濃国(水の国)・石見銀山(山の国)での
仕事、「目のつけどころが平右衛門さんでしょ！」
という内容を中心に、親子で見ただけのように
各地の資料120点以上でご紹介します。



川崎家に残る江戸時代の備蓄米



絵でみる平右衛門物語(画:つだなおこ)

1/24(土)～3/8(日)

会場 本館特別展示室

観覧料 無料

(ただし博物館入場料が別途必要です)

《関連企画》

講演会① 石見銀山での川崎平右衛門の仕事

2月8日(日) 14:00～16:00

講師: 仲野義文氏(石見銀山資料館館長)

講演会② 川崎平右衛門が開いた「武蔵野新田御栗林」

2月22日(日) 14:00～16:00

講師: 野田政和氏(元府中第七小学校校長)

会場: ①②とも本館大会議室

定員: 先着100名(無料)

展示解説: 担当学芸員による解説

会期中の土曜日(1月31日と2月14日
を除く)と日曜日(2月8日と22日
を除く)

都市化と自然再生



左写真は開催中（平成21年3月22日まで）のテーマ展「都市と野鳥」会場風景。都市化が進む府中では、特化した環境が残っているため、まだまだ見られる野鳥は豊富であることを紹介しています。

本稿では、この展示を立ち上げる際に平行して考えていたことを綴ります。

世界規模で人間による自然界への侵攻、すなわち都市化の波が絶えず押し寄せています。近年話題となっている地球温暖化も、都市化による影響の筆頭と考えられています。このまま進めば、あと数十年後には想像を絶するような気候変動や天変地異が勃発する騒ぎにも発展しているくらいです。頭では理解していても、人間の生活形態が後戻りを許してくれません。もはや一人一人の意識改革を地道に行うしか方法は無いのでしょうか……

都市化と人工の森

当館の広い敷地内を歩いていると、風に揺れる木々の葉と野鳥のさえずりが見事な和音を奏でます。自然界に迫る危機は遠い辺境の惑星で起きていることで、我々とは無関係ではないかと錯覚してしまうような情景です。確かに府中市及びこの周辺は、東京の緑が後退していく中で、特化した自然環境をいくつか残しつつ、街と緑がうまく融合している貴重な都市空間と言って良いでしょう。多摩川に沿って造られた当館のような人工の森でさえ、20年以上の時を経て見事な生態系を成立させてしまうのですから。

自然観察指導員や府中野鳥クラブによる当館敷地内の野鳥カウントが定期的に行われていま

すが、今年だけでも色々な種類が確認されています。春にはキビタキやアオゲラ、ついこの間の10月にはツツドリやエゾビタキといった、まさに森林性の野鳥が観られました。都市化が進む反面、消失した緑を別の形で復活させるという当施設のような例で言えば、自然の再生力は、時間をかけながら造成・植栽から始まった郷土の森を相当良質な空間へと変化させました。留鳥はもちろん、渡り鳥の中継地にも適した環境で、1時間も歩けば20種前後は観察できる好スポットです。多摩川という特化した自然の傍に位置していることも幸運だったのでしょう。このように都市化で失われた自然は、人間の手によって少なくとも外観及び、新たな機能を有する緑として再生できるようです。

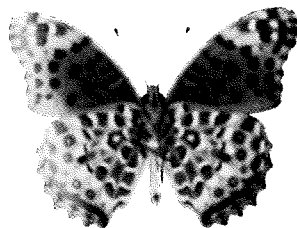
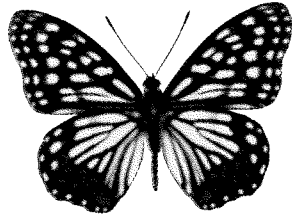
Welcome? 新規来訪者

里山に代表されるように、ひと昔前なら人間の生活と密着した形で自然は存在していました。人間の手が加わることで自体を維持要素に加味した上での生態が成立していたのです。雑木林があっても一体となる人間の生活が無くなれば、完全に再生することはすでに不可能です。あくまでも元通りに機能してこそ自然の姿……単に植物や動物の数が豊富なだけではなく、大切なのは多様な種

類が絡み合う調和のとれたメカニズムの再生になります。市内の浅間山は里山の名残ですが、都市公園としての管理下に置かれ、ある意味で都市化に内包された自然環境です。多摩川も防災や治水の観点から、あくまでも流域に生活する人間を前提に成立する都市環境と言えます。さらに人間の手は、従来の生態系に外来生物という新たなファクターを混入させます。

この夏、初めて園内でアカボシゴマダラ(右写真)を確認しました。ベトナム北部から朝鮮半島にかけて分布し、日本では奄美諸島のみで生息する蝶です。ゴマダラチョウによく似ますが後翅に赤い紋が並ぶ特徴があります。1995年に埼玉で確認された後、神奈川でも1998年以降見つかって広がっているようです。初発見まで大陸との間に位置する西日本方面での確認例はひとつもないことから奄美の個体が北上したのではなく、中国産の個体を誰かが持ち込み、飼育中に逃げ出したか、故意に放したかと言ったところでしょう。やはり同じ90年代半ばに、市内浅間山に隣接する多磨霊園で大陸産のホソオチョウが確認された時期がありましたが、これも原因は同様と考えられます。

蝶の例でもうひとつ。多摩川河原には数年前からツマグロヒョウモン(右写真)も目立っています。もともと近畿以西で生息する蝶が90年代以降北上し、06年以降は北関東にほぼ定着しています。こちらはおそらく温暖化の影響と考えられます。前者は人為的攪乱、後者は気候変動要因と、理由こそ異なるものの、元を辿れば都市文明化による生態系への侵攻に他なりません。加えて、前者のような放虫は愉快犯とは限らず、少ない自然を手持ちで補う善意で実行するケースも予想されますが、この自然観の誤解を解くことこそ重要な使命だと思えます。物理的な都市化の解消は難しくとも、自然への正しい理解が伴えばダメージを最小限に抑えられるのではないかと考えるからです。



自然再生への険しい道程

府中では、都市化部分にうまく従来の自然が乗り合う形で、何とか緑が残されていることはテーマ展「都市と野鳥」にも示しています。ハシブトガラスを筆頭に、山野の野鳥であるウグイスやメジロも見られ、市街地にも自然再生への手がかりとなる因子が生きています。決して緑が消失したわけではありませんが、生態系の構造が単純化し、多様性という点では乏しい状況を作ります。外来種の侵入・定着も従来のバランスを壊す役割を果たし、緑の後退は防げても生態系内部からの破壊は進行し続けるのです。あくまでも本来あった自然再生が正論であり、異なる自然の新規参入で量的に維持されていても危機は脱していないこととなります。当館で人気の特別展「世界の昆虫博」における海外の大型カブトやクワガタの生体公開も、観覧者サービスや演出目的とともに、実はこんなメッセージを発信しているのです。

今、あちらこちらでビオトープの設置など、自然修復工学的発想がさかんですが、自然の構造をよく理解した上で取り組む必要性を感じています。10月15日の朝日新聞夕刊の記事にこんな内容の記事が掲載されていました。

『身近な自然と密接に関わることで形づくられる「里山」の今を調査する全国規模のプロジェクトが開始。多様な生物を育む生態系を守り、人と自然の共生の道筋を示すものとして発信する狙い。

里地里山の衰退は政府が07年末に閣議決定した「第3次生物多様性国家戦略」の内、生物多様性の危機のひとつ。国の将来の環境政策の方向性を示した「21世紀環境立国戦略」では、人と自然が共生してきた里地里山の知恵を世界に提案することを柱として打ち出す。

05年にまとめられた報告書では、20世紀の後半、世界の生態系が人類によって大きく変えられた結果、生物種の絶滅速度は地球の歴史の平均と比べて約100倍から1000倍に加速している。哺乳類の25%、両生類の少なくとも32%が絶滅の危機にある、などと指摘。その上で生態系の保護に政策の焦点が定まるよう促す。』

人間は、もう十分に気付いているようですが・・・。



from Tom to Hana

新米学芸員の

交換日記



念仏講再現（写真は市内四谷・間島合同の様子）

③村の助け合いのこと

Hanaさんへ。お返事ありがとうございます。やはり現在でも続いている府中市内の農業形態は、江戸時代以前から脈々と続けられてきた可能性が高いのですね。現在ではさまざまな農業が導入されていながらも、宅地化の進行によってどんどん田畑が失われています。そんななかでも、地域の特性を生かし、どのように人びとが暮らしてきたのか、を伝えていくことは、今後私たちがどのように暮らしていくべきかを考えるときのいい材料になると思っています。

さて、「八幡町に念仏講があるのか？」というご質問でした。念仏講は冠婚葬祭などの際に集まり、念仏を唱えたり、葬儀の手伝いをしたりする役割をもった地域の助け合いのための組織です。町内会よりももっとせまい範囲でまとまり、法事などの際には鉦や数珠を使用して念仏を唱える、というものでした。それ以前にも百万回念仏を唱えれば願い事が叶う、といった行事もあったようで、百万回（百万遍）唱えたのを記念して石碑や石仏を造立したりします。

こうした組織であるため、どの地域でも必ずといっていいほどありました。八幡町にもあったようです。すべての念仏講を調査しきれていないのですが、かつては二つの組に分かれていたといいますが、それは八幡宿（八幡町の旧名）が大國魂神社に奉仕することが多く、葬儀や法事などが出た場合、奉仕に差し障りがあるため、あえて二つに

分け、どちらかが神社に奉仕したから、と言われていました。しかし現在、念仏講組織は葬儀業者が担当するようになり、解散したり存続しても名前のみ、といった地区が多いように思います。

こうした村内の助け合い組織がどのように構成されているか、市内で調査されたことがあります。『府中市史近代編資料集第七集 府中市の庶民生活調査資料集』（1971年）がそれで、昭和40年代の人見（若松町の一部）の社会組織を詳細に分析したものです。現在の町内会以外に大山講、榛名講といった名所に参詣する組織があります。さらに（多少のずれはありますが）お互いの生活を助け合うためのクミアイ（組合）が5～6軒単位であり、そのクミアイが2つ集まって葬式などを司る講中（念仏講）を形成しています。さらに講中が2つあわさって「ビシャコウ」という、人見の神社祭礼を司る組織を形成していました。

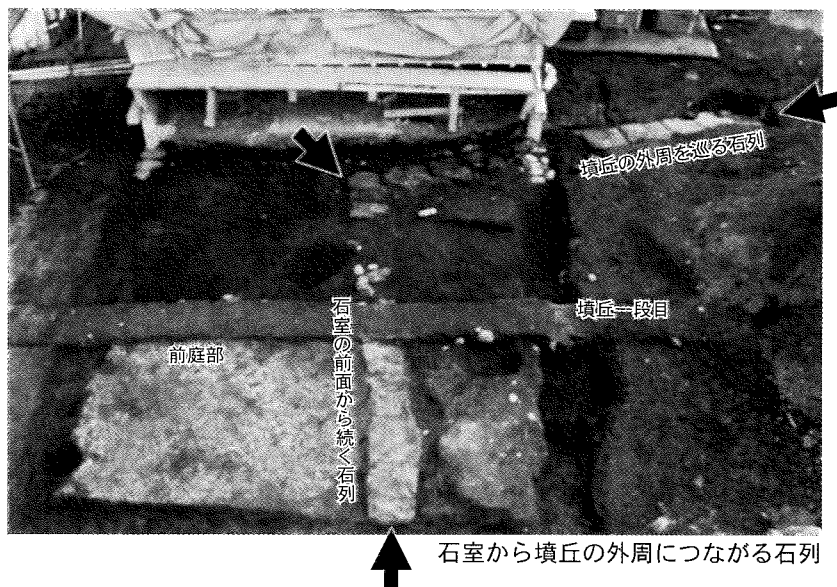
「ビシャコウ」とは、歩射講と書いたものと思われる。関東地方でよく行われる、的に向って弓を射る神事のこと、で、「ビシャ」「オビシャ」などとも呼ばれます。しかし弓を射る神事は、昭和40年代にはもはや人見では行っておらず、記憶としても残っていません。組織名称としてのみ伝承されている言葉のようです。江戸時代以前まで遡れば矢を射た記録などがあるのかもしれませんが、手がかりになる資料はありますか？あるいは今後発見される可能性はありますか？（Tom）

最近の発掘調査

国史跡 武蔵府中熊野神社古墳

の最新情報

府中市文化振興課 塚原 二郎



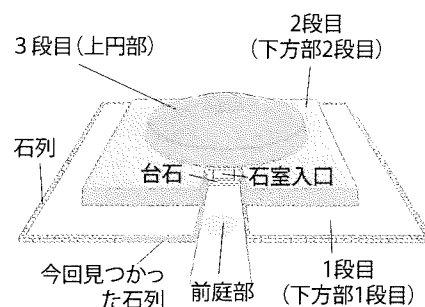
国史跡武蔵府中熊野神社古墳は、全国でも珍しい上円下方墳として、本誌でも何度か紹介してきました。今回は保存・復元の整備工事中の新たな発見と工事の状況について紹介します。

まず新発見は、古墳の整備工事の一環で、熊野神社本殿（市有形文化財）の覆屋を造り直す工事中のことでした。

これまで、墳丘1段目の外周には石室と同じ切石が全周すると思っていました。ところが、この石列が石室の前面で石室へ向って折れ曲がっていることが判明したのです。これまでの調査では、石室前面から八の字状に開く河原石積みを確認されていましたが、この八の字に開く河原石積みに切石の石列が接続していたのです。一般的な古墳では石室の前にこのような空間を設けることがあり、「前庭部」や「墓前域」と呼ばれています。しかし、熊野神社古墳のように古墳時代の終わり頃の古墳では、しっかりと前庭部を設けることは珍しく、貴重な発見となりました。この場所は、死者を埋葬する際に儀礼の空間として使われたと考えられます。

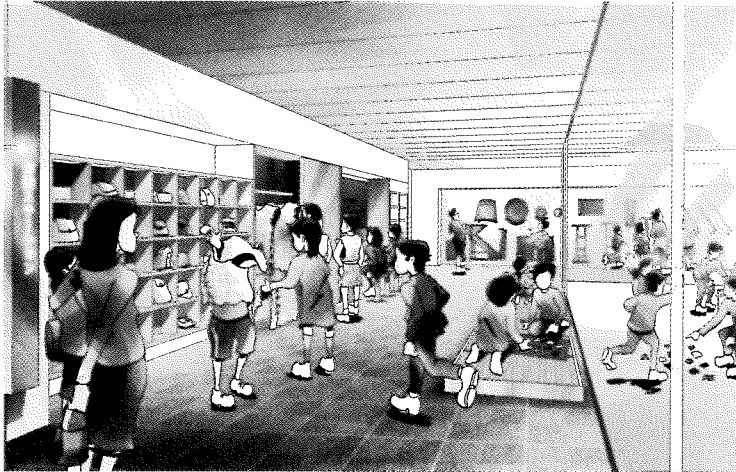
ところで、八の字に開く2本のラインの起点は石室の中軸線にあり、石室から南へ約25度の角度で開いています。そして、石室の長さ、石室から1段目の石列までの長さがほぼ同じ長さになっています。さらに、石室正面の石列の途切れる部分は約5.3mで、石室入口に置かれた大きな台石の幅のほぼ3倍の長さにあたります。このように、この古墳はかなり綿密な設計がされていたことがわかります。

さて、古墳の整備工事は、当時の人たちが造った姿をイメージできるように、できる限り同じ形、大きさに復元することを目標に整備しています。現在は、ほぼ墳丘の形ができあがり、古墳の表面に河原石を葺く作業に入ったところです。おそらくこの「あるおぜあ」を読んでいただく頃は、河原石が葺かれた状態が見えてきていることでしょう。そして来年3月の南武線の西府駅開業時には、国内最大最古の上円下方墳がみなさんの眼前にあらわれます。ご期待ください。



推定復元図

⑪ 「体験ステーション」は、「ふるさと体験館」とどう違う？



「体験ステーション」イメージ画像



「ふるさと体験館」全景

これまで常設展示室を見学する際、「ギャラリー」と呼ばれる空間が存在したことに気づかれていたでしょうか？これまで「市の花うめ展」や写真展会場として使用されてきた、ガラス張りの廊下です。エレベータを降りると常設展示室の入口と出口をつないでいます。

今回のリニューアルでこの部分は、「体験ステーション」という名で参加体験型のコーナーに生まれ変わります。

ところで、ご存知の方も多いと思いますが、当博物館には本館の建物とは別に、「ふるさと体験館」という施設があります。そのため、リニューアル後には「体験」という名前のつく施設が博物館内に二か所になります（すこしまぎらわしいですね）。

しかし、ふたつの場所でできる体験の種類は異なります。「体験ステーション」はむかしの衣類、道具類など、展示資料と関係するものを中心にさわったり遊んだりでき、展示資料やそれをもとに複製した道具類をつかっているいろいろな体験をしていただくためのコーナーです。

それに対して、「ふるさと体験館」では、これまで通りわら細工や竹細工、折り紙など、自分で何かを作る体験、鍛冶屋仕事など職人の技を見る体験ができます。資料保存の観点から、常設展示室内で水や火、枯れていない植物などをつかった手づくりの体験は「体験ステーション」では行えません。また面積もそれほど広くないため、竹馬、輪投げといった屋外での昔遊びもこれまでどおり「ふるさと体験館」でできます。

また新たに「企画展示室」がつけられることにより、これまでより常設展示室の展示スペースは狭くなります。そのため常設展示室で伝えきれないものを見たり、さわったり、遊んだりする空間として、「体験ステーション」が皆さんのお役に立てば、と考えています。